『宮本武蔵』に含まれる修養
――受け継がれる講談本の文化――

大熊　達也

はじめに

これまでに[1]、明治期の速記講談、大正期の『講談倶楽部』上の新講談での宮本武蔵作品の系統化[2]、比較、検討を行ってきた。明治期には実父の仇討ちをする武蔵が描かれていたが、大正期の『講談倶楽部』では武者修行をする武蔵へと変化した。その理由として、『講談倶楽部』では創刊者の野間清治と講談師との間に確執が生じ[3]、書き手が講談師（厳密には講談師の速記者）から小説家へ移ったことで変化が生じたことを指摘してきた。

以上を踏まえ、本稿では一九三五年（昭和一〇年）から一九三九年（昭和一四年）まで、「朝日新聞」に連載された吉川英治『宮本武蔵』[4]に焦点を当てる。吉川の描く武蔵も、大正期と同様に武者修行をする人物である。明治期の速記講談の仇討ちをする武蔵像は消えてしまったが、吉川は明治期、大正期の宮本武蔵作品双方の要素を『宮本武蔵』内にて取り入れている。これまでに明らかにしてきた明治期の速記講談、大正期の新講談の特徴が昭和期の『宮本武蔵』にどのように受け継がれているのか。この三世代の宮本武蔵作品を比較、考察し、吉川の『宮本武蔵』の特性と、宮本武蔵の大衆認識が吉川の描く宮本武蔵像へと単一化された理由を明らかにする。本稿内にて『宮本武蔵』とのみ表記しているものは、全て吉川の作品を指すこととする。

一　『宮本武蔵』連載の背景

まず始めに、吉川英治が『宮本武蔵』を連載する背景を考察する。吉川は様々な職を経験した後、二八歳の時に東京毎夕新聞記者となり、社長命で『親鸞記』の連載を開始する。これが好評であったが、関東大震災の影響で新聞社は解散し、大八車で牛丼を売り歩くことで生計を立てた。その後、三一歳の時に、本格的に文学の仕事を志すようになった。[5]

佐藤忠男は吉川の作家活動時期を三つに区分している。

第一期は一九三〇年代半ばまでで、「剣難女難」「鳴門秘帖」「牢獄の花嫁」「神州天馬侠」などの伝奇性の強い時代小説で大衆的な人気を得ていた時期である。第二期は一九三六年から一九三九年まで、つまり「宮本武蔵」を書いていた時期である。この作品で吉川英治は時代小説を人間形成の物語に高め、たんなる通俗小説とも純文学とも違う分野を切り開いた。第三期はそれ以降「新・平家物語」や「私本太平記」などで国民作家と呼ばれるような歴史と国民的なモラルの語り手となった。[6]

佐藤は、吉川の作品が現代までの長い期間読み続けられている理由を「『宮本武蔵』で彼が、単なる荒唐無稽な時代小説より遥かに高い水準に達したと見られるようになったから」だと述べている。それでは、吉川の時代小説にはどのような特徴があったのだろうか。

吉川英治は、その奔放な空想力によって時代小説を量産したのだが、それを支えていたのは氏の絶えざる「調査」だったのである。[7]

「時代小説」は、史実に臨場感をもたせるように脚色し、コメントを加える講談、すなわち一種の歴史叙述と、歴史のある時期を舞台として虚構の人物を活躍させる物語とを二極にもち、両極の間でゆれつづけるが、その揺れの中で、吉川英治の小説作法は、しだいに臨場感をもたせるように史実を脚色したものへと傾いていったわけだ。[8]

吉川が描く歴史小説の特徴について、塚越和夫は「調査」、

鈴木貞美は「臨場感をもたせるように史実を脚色した」ことだと述べている。確かに吉川は『宮本武蔵』の作中でも、西暦一六〇〇年前後の武士や庶民の日常を細かく描こうとしており、時代小説に臨場感を持たせるために、詳細な史実の調査をしていたことがうかがえる。

吉川の代表作である『宮本武蔵』を執筆する契機は、一九三二年（昭和七年）九月二十八日、赤坂の山の茶屋での読売新聞文芸部主催の座談会だったと安宅夏男は述べている。この座談会には吉川の他に、直木三十五と菊池寛も出席し、直木と菊池の間で、「武蔵は名人か否か」という論争に発展し、吉川にも矛先が向けられる。

この時、吉川は、「この答えは、小説で書く」と言って即答しなかった。つまり、このことは直木、菊池、吉川三者の間のみならず、公的にも吉川にバトンタッチされた、と言ってよい。

「小説で書く」と述べたように、この座談会から三年後の一九三五年から、吉川は『宮本武蔵』の連載を開始した。

吉川は作家活動の中で、講談社に投稿する機会が多くあった。大正期の講談社は大衆向けの出版を行っており、教養書を出版する岩波書店とは一線を画していた。『講談倶楽部』創刊者の野間清治が、大衆向けの講談本の中に修養を求めていたように、講談社は修養向け書籍が多かった。大正期に生まれた教養主義、修養主義の二つについて桜井良樹は以下のように述べている。

教養主義は、知的に高尚なものを求めることによって人格の完成をめざすことを理想とするものであった。そしてこれは、型にはまったものをめざすものではない、型にはまらない何物かを求めるという点において、しばしば修養主義と対比された。（中略）それ（修養主義）[一〇]は武道、武芸や禅の修行・瞑想、禁欲、自己鍛錬あるいはその他の行為の繰り返しなどによって心身を鍛え健全な、発達を図るものであった。[一一]

吉川の『宮本武蔵』は武者修行を繰り返す物語であり、大衆に向けた修養を含んだ作品傾向にあった。また、新聞小

説であったこと、第一巻の初版が完売になったことからも多くの大衆にとって読みやすいものであったのだろう。尾崎秀樹は「宮本武蔵が剣の道を極める人物」という大衆認識を定着させたのが、吉川英治の『宮本武蔵』の功績だと述べている。[12] 吉川の影響もあり、江戸期から始まり明治期まで続いた仇討ちをする宮本武蔵のイメージは現在にあまり引き継がれてはいない。先行研究にて、[13] 武蔵が仇討ちをした事実も無かったとされており、吉川自身もこの仇討ちのイメージを払拭すべく、執筆を開始したことを述べている。

武蔵のときでも、掲載前に朝日からタイトルで問題が出ました。学芸部の醐醍院氏から電話で、「どうも申上げにくいんだけど、宮本武蔵じゃという社内の幹部会の声なんですが」と暗に題材を更えてほしいような口吻なんです。「それはきっと講談の宮本武蔵を連想されてるんでしょうが、少し変って書きますから、まあそれにしておいて下さい」と、まあ何とかそこを云張って、とにかく始めたものでした。それが僥倖にあんな長くつづくことになったんですよ。[14]

かつての余りに誤られていた武蔵観を是正して、やや現実に近い、そして一般の近代感とも交響できる武蔵を再現してみたいという希いを私はもった。[15]

「少し変って書」き、「かつての余りに誤られていた武蔵観を是正」することで、明治期の速記講談にある仇討ちをする武蔵像は描かれなくなった。

「宮本武蔵の正伝は少ない」[16]と吉川も述べるように、「現実に近い」武蔵像を、オリジナルの要素を交えて執筆した。吉川は執筆する上で、人間にとっての希望を再起させることを目指したことを述べている。

信ずるということが僕は一番欠けていると思う。つまり、自分を信じ、人を信じ、自分の今日の生活を信じて行くというような信念が非常に弱いと思う。それからもう一つは、さっき云った希望の世界、それからもう一つ考えられることは、非常に人間が理智的になって来てい

ることだ（中略）だから今日の文化に対する反省として、僕等がが今日忘れられている神経を持っている人間をここに持ってくれば、僕等の神経が覚める。そうしてそこに小説としての興味と、生活上での興味と二つを持って来る。」[17]

若者たちに忘れられた「信じる」精神を喚起することを大きな目的としている。吉川が宮本武蔵のひたすらに剣の道を信じ突き進む人生を描いたことの裏付けとなる。青年タケゾウ（武蔵の幼名）が、「信じる」ことを剣の道の中で会得し、その主人公像に読者が自己投影できるようにしていた。『宮本武蔵』が連載された一九三五年（昭和十年）から一九三九年（昭和一四年）の日本は戦時下にあり、明日の命も分からぬ状態の若者たちにとっては、武蔵の生き方が何よりの人生訓となったと尾崎秀樹は述べている。

戦場の死生観に直面せざるを得なかった若ものたちにとって、古典的な哲学書よりも、武蔵の生き方がより切実な人生訓をはらむものとして、受け取られたのだった。[18]

半世紀以上に渡り、『宮本武蔵』が宮本武蔵を題材とした文学の代表となっているのは、修養を意図し、生きる希望を与えたことで、戦時下の若者からの支持を集めていたことも理由の一つだろう。しかし、戦時下の若者に生き方を提示した内容が、戦後に批判を集めることになるが、それについては後述する。

修養を求めていた吉川は、宮本武蔵という人物についての伝承を基に描き、吉川の空想のみで描くことはなかった。[19]宮本武蔵遺蹟顕彰会の『宮本武蔵』を資料として大いに活用したのだ。顕彰会の『宮本武蔵』は、一九〇九年に発行されたもので、宮本武蔵に関する資料集である。吉川自身も、「歴史家以上に歴史作家は歴史を知っているべき」[20]と述べているように、武蔵の旅の道中における地理や庶民の日常を詳細に描き、当時の暮らしを詳細に再現していた。

吉川が言及している通り、歴史に沿った流れを汲みながらも創作の要素は多い。次節では、明治期の速記講談、大正期の新講談の作風を、昭和期の吉川がどのように受け継

いだか、またどのように改変させたかを比較し検討する。

二　作品比較で浮き上がる考察

明治期の速記講談は仇討ち、大正期の新講談は武者修行の物語であった。吉川の『宮本武蔵』も物語の根底にあるのは武蔵の修行であり、明治期の速記講談での武蔵が実父の仇討ちをする要素は引き継がれず、大正期の新講談の系統を受け継いでいる。しかし、大正期の新講談と同系列に扱うことは難しい。その理由の一つに、物語の長さがある。連載数は一〇〇〇回を超え、講談社文庫第八巻には当初の予定話数を大幅に引き延ばしたことが記載されている。

当初、二百回ぐらいの約束で新聞連載が開始されたが、作者の意気込み、読者・新聞社の熱望で、五年がかり、千余回の大作に発展した。[21]

その長さ故に、主人公の武蔵以外にも、宿敵の佐々木、親友の又八、幼馴染のお通などの他の登場人物の視点から物語が描かれることが多く、作中人物の人生も細かく表現されている。

仇討ち物語は廃止され、武者修行の物語として宮本武蔵が描かれているが、『宮本武蔵』の中にも、明治期の速記講談の要素を含んだ部分もある。

この節では、明治期の速記講談、大正期の新講談と吉川英治の『宮本武蔵』の比較を行う。新たに出てきた新要素については、多くは触れない。先述したように、吉川の作品の分量が他に比べ圧倒的に多く、新出の内容を列挙すると限界が見えないからだ。

はじめに、比較するのは武蔵の宿敵である佐々木の作中での役割である。明治期、大正期、吉川の武蔵に共通している内容は決して多くはない。主人公が宮本武蔵、宿敵が佐々木であること程度に留まる。拙稿[22]で、伝承として佐々木との決闘が有名であったことにより、宮本武蔵の物語の結末となっている可能性を指摘した。仇討ちから武者修行へと作品テーマが変化しても、佐々木が物語の終着点となることは、一貫して共通している。

そこから手をついて、一礼すると武蔵の姿は、一滴の血もついていない櫂の木太刀を堤げたまま、さっと北磯のほうへ走り、そこに待っていた小舟の中へ跳びのってしまった。（八巻）

明治、大正、昭和の三つの時代の宮本武蔵作品で、仇討ち、手合わせと理由は違うが佐々木を討ち取る結末は共通している。三世代唯一の共通点である佐々木の存在により、宮本武蔵作品のテーマは佐々木を討つ物語と捉えることもできる。

伝記上では佐々木は武蔵が対戦した剣客の一人であり、風土資料として残っていた以外には、「実父の仇」のように特別な対戦相手ではない。伝記、伝承を種本として宮本武蔵を描く上で、情報量の多い佐々木との決闘に焦点を当てたことが、文学としての宮本武蔵の最大の特徴だ。大正期の新講談での佐々木は、物語終盤で登場するだけにとどまるが、明治期の速記講談と『宮本武蔵』での佐々木は、物語を通して武蔵の対立項として描かれる。『宮本武蔵』のみ、佐々木の視点から物語が進行する場面があり、この点に着目すると、佐々木を裏の主人公と解釈することが可能だ。

物語が宮本武蔵の視点から描かれることで、佐々木は宿敵として描かれることになり、逆の視点に立つと佐々木の宿敵として宮本武蔵は描かれる。敵役の視点から武蔵が描かれることによって、『宮本武蔵』の特徴の一つである「仇討ちをされる武蔵」を読者が受容することを容易にする効果がある。「仇討ちをされる武蔵」については、後述する。

宮本武蔵に関する史実は少ないが、佐々木の史実はそれ以上に少なく、現在でも正確な年齢が判明していない。そのため、明治期の速記講談では武蔵より年齢が上の初老の人物として、大正期の新講談では武蔵と同年代、もしくは武蔵よりも年下の若者として、『宮本武蔵』では同年齢の人物として描かれるように、佐々木の年齢は一定ではない。それにも関わらず、一九五〇年には戦後のタブーとされていた剣豪小説の復活として村上元三著『佐々木小次郎』が朝日新聞に連載された。[23] 今まで宮本武蔵の敵役であった佐々木を主人公とする作品である。吉川が武蔵と対照的なもう一人の主人公として佐々木を描いたことで、明治、大正期にはただの敵役であった佐々木を主人公に据える作品

が誕生したのだろう。

続いて、求道の要素について触れる。大正期の新講談から、武者修行のテーマが採用された。浪花節騒動や伝記に近い内容に近づけたことで生まれた要素である。『宮本武蔵』も武者修行がテーマであるが、吉川の特徴である求道の要素が取り入れられる。この求道を取り入れる変化によって、武蔵の剣の位置付けは大きく変わる。新講談では「其の頃の武道者の誰もがする武者修行」[24]と描かれるように、特に意味付けのない一般的な修行の旅であったことが分かる。吉川の作品には求道が追加要素として加わった。第一節にて吉川が「宮本武蔵を歴史に沿って描くこと」、「信じること、希望を持つこと」を作品に含ませることを意図していたことは述べた。前者は、武蔵の伝記を種本として描いた武者修行の要素であり、大正期の新講談でも、『二天記』[25]を種本とした部分が見受けられることからも取り入れられていた。後者は『宮本武蔵』のみの特徴で、これが求道の要素として重要になる。武蔵は求道の信心を持って、剣の道を追究した。神や仏を信じる武蔵を描き、「信じる」生き方を伝えようとしていたと考えられる。

武者修行者たちにとっては、寺院が解放されていた。武士と寺院との密接な関係、また、武者修行の身的修養に、打ってつけた場所として、寺院はいつでも彼らの一泊の乞いは容れてくれただろう[26]

武者修行と寺院は、歴史的に関係性が深いものであった。吉川が求道を武者修行と並列に据えているのは、彼の特徴である「調査」「臨場感」が発揮され、一六〇〇年代初頭の武者修行の旅を詳細に描いたからである。

求道を学ぶ契機として、『宮本武蔵』には武蔵に悪童としての要素が復活する。明治期の速記講談の講演伝記系と共通して、幼少期の武蔵は悪童として描かれる。明治期の講演大衆系、非講演系では武蔵が幼い頃から人命を尊んだり、聡明な神童として描かれるために、悪童の要素は出てこない。『宮本武蔵』で村人から忌み嫌われる存在であった武蔵は、無実の罪で追われる身となり、その渦中で村人を殺害し罪を背負った青年となってしまう。明治期の速記講談の講演伝記系、『宮本武蔵』に共通する武蔵が悪童であった要

素は、宮本武蔵は悪童であった可能性を記した伝記に由来するだろう。

新免武蔵守玄新ハ、播州ノ産（中略）童名辨助ト云、幼年ヨリ父カ兵法ヲ見コナシ、常ニ誹謗ス[27]

悪童であったと断言できないが、幼少期には父親を誹謗する慢心を抱いていた。しかし、明治期の速記講談も吉川の武蔵も、成人すると悪童の要素は消滅する。明治期の物語は仇討ちによる勧善懲悪の枠組みを持っており、作中で描かれない数年間の成長の間に武蔵は善、佐々木は悪に変化し、武蔵の悪童の要素は自然に消滅する。一方、『宮本武蔵』では姫路の白鷺城に幽閉されている間に武蔵が求道について学ぶことによって悪童の殻を破り、悪の要素が消滅するのである。

『宮本武蔵』では武蔵が悪童の殻を破る場として姫路の白鷺城が描かれ、明治期の速記講談では姫路の天守閣が、旅立ちの起点として描かれる。共通する姫路の地で、明治期の速記講談の武蔵は細川家へ仕官する身から仇討ちをする人物へ、吉川の武蔵は悪童から武芸者へと変化する。つまり姫路の城は武蔵の人格の変換器として共通して用いられる。姫路城に留まる理由は異なるが、武蔵の作中での役割を変化させる装置として用いられており、吉川が明治期の速記講談を種本としたことがうかがえる。

吉川が武者修行のテーマに求道の意図を求めていたことが、大正期の新講談には描かれない悪童の武蔵、姫路の城が再登場する要因だろう。

書物はいくらでも見よ。古の名僧は、大蔵へ入って万巻を読み、そこを出るたびに、少しずつ心の眼をひらいたという。お主もこの暗黒の一室を、母の胎内と思い、生まれ出る支度をしておくがよい。（一巻）

これは、武蔵を幽閉する際に、武蔵の恩人である沢庵和尚が述べた言葉である。武蔵は三年間書物を読み求道を学び、修養を身に付ける。「大蔵へ入って万巻を読」むことで、求道の道へ入り、新たな人格として再生する。名前も「新免武蔵（シンメンタケゾウ）」から「宮本武蔵（ミヤモトムサシ）」

へ改名することで、新しい人生をスタートさせる。村人を殺した贖罪として、人格を再生させることが沢庵和尚から与えられた武蔵にとって初めの求道であった。伝記や明治期の速記講談をもとにしているだけではなく、吉川が求める「信じること」を忘れない求道の要素を活かすために、悪童であった過去を武蔵に背負わせたのだろう。

求道以外にも吉川の『宮本武蔵』の特徴として「仇敵となった」武蔵が描かれる点が指摘できるだろう。仇討ちをする宮本武蔵の物語は、大正期の新講談にて消失し、『宮本武蔵』でも武蔵が仇討ちをすることはない。その一方で、明治、大正期では描かれることのなかった「仇討ちをされる」人物になる。武蔵を仇討つことを企んでいるのは、お杉婆、吉岡一門、宍戸梅軒の三つの組織である。お杉婆は誤解による逆恨み、吉岡一門は当主の清十郎が武蔵に勝負を挑み敗北したこと、宍戸梅軒は山賊である実兄の辻風典馬が正当防衛で武蔵に斬られたことが仇討ちの理由である。

本位田家では、御領下にもいたたまれぬことに相成りますので。—何とぞ、武蔵、お通、沢庵の三名討ちとるところまで、通行おゆるし願いたい（『宮本武蔵』一巻）

引用部は、仇討ちの旅に出るお杉婆が関所に許可を求めている場面である。武蔵に倒された者の関係者からの視点で物語が進行することもあり、仇敵として武蔵が描かれる場面も多い。

武者修行を通じて、武蔵が対戦相手を倒すことは物語の中で必然的な事象である。武蔵の武芸者としての本質は、姫路の白鷺城での幽閉期間に目覚めていく。

孫子の地形編が机の上にひらかれていた。武蔵、会心の章に出会うと、声を張って幾篇も素読をくりかえした。（一巻）

『孫子』は兵法書であり、その中でも地形編は土地を絡めた兵法について記載されている章である。「森や山が剣の師である」と述べる武蔵の兵法を更に向上させている。兵法を身に付けることは、相手を殺害する方法を身に付けることにもなる。

また、武蔵が様々な修羅場を潜り抜け、剣豪として有名になっても世間からの評価は低いものであり、争いを避けても卑怯と呼ばれる状態となる。

――彼は卑怯者だ

――卑怯者の張本だ

――恥知らず、武士道よごしの骨頂だ。あいつが京都で吉岡一門を相手にしたなどというのは、よくよく吉岡が弱かったか、逃げの一手で、巧く逃げて、虚名を売ったに違いない（六巻）

戦いを重ねるごとに、世間からの辛辣な批判を浴びることも多くなる。勝利が強さ、名声に直結することはなく、勝利を修めても人命を奪うことで、恨みを買うことにもなる。一方の佐々木は人命を奪う描写はほとんどなく、世間からの評価は高いものであった。

『宮本武蔵』では勝利すること＝強さの定義が消失し、剣豪としての強さの解釈が他の宮本武蔵作品とは異なる。吉川は仇討ちをする武蔵像を是正しながらも、新たに加えた求道の要素を利用し、明治期までの仇討ちの伝統を受け継いだ、仇敵としての武蔵を描いたのだろう。

最後に、吉川の描く人物像について考察する。『宮本武蔵』のみに見られ、重要な存在であるのは武蔵の親友、本位田又八である。吉川が武蔵を描く上で「近代精神の中にも交感できる武蔵を再現したい」と思案を抱いていたことは先述した。舞台は一六〇〇年代の江戸初期であり、昭和初期の読者にとって、武蔵の精神や修養に共感を覚えることは難しかっただろう。そこで又八の存在が活かされることになる。

（本位田又八は）[28] 特に武蔵の引立役だの道化には少しも書いていないつもりである。ありふれた現代の青年の一つの型をとって慶長の戦国に呼吸させてみたまでのことである。[29]

吉川の創作した人物である本位田又八は、「現代（吉川の執筆期から昭和初期）の青年」を物語に溶け込ませる役割を持っていた。読者にとって、武蔵が「理想の自分」だとし

たら又八は「現実の自分」であり、身近な存在として物語に登場していたのだろう。又八は武蔵とお通を裏切り、自分より一回り年上のお甲と駆け落ちをする。その後、佐々木小次郎の名を騙ったり、金銭目当てに徳川秀忠を暗殺しようとするなど、数々の不祥事を働く。欲望に忠実であり過ぎたことの因果応報である。しかし、臆病な性格であることから全て失敗に終わる。物語中でも、煩悩を捨て武士道を貫く武蔵と煩悩に溺れる又八という対比構造になっている。武蔵と佐々木は一流の剣豪による兵法の対比であるが、武蔵と又八は人格の対比となっている。武蔵の引き立て役のように考えられている又八は、「理想の自分」になれない現実の読者と捉えることができる。誰よりも生に執着し、感情の起伏が激しい又八は、物語中で蔑視されることも多く、武蔵や佐々木に比べると欲求に忠実で、人間の本能のままに生きている。

ヒロインが登場することも、大きな特徴である。煩悩を排除して修行に励む武蔵にとって、唯一、心を惑わされるのがヒロインのお通の存在である。お通と一緒に暮らす幸せと剣の道を追究することの二択で、思い悩む場面もある。

いじらしい！あれまでに自分を慕ってくれるものが、姉以外にこの天地にあろうとは思えない。（『宮本武蔵』一巻）

女の黒髪には、剣も鈍り、道も喪ってしまうものと、それを惧れていたのである。（『宮本武蔵』四巻）

恋愛感情が武蔵の修行の弊害になる可能性を含んでおり、武蔵にとって大きな悩みであった。大正期の新講談の中でも渡辺霞亭の『宮本武蔵』には女性が登場した。両者を比べると、連載時期の長い作品であることが共通している。吉川武蔵の中でのヒロインは武蔵の幼馴染であるお通と、タケゾウ時代からの知り合いである朱美という二人の女性である。物語冒頭から登場し、武蔵を慕う人物として描かれる。武蔵もお通に好意を寄せるが、修行の妨げになることや、いつ失うかわからない自分の命を懸念して恋仲に発展しない。

「道」のみでなく「剣」そのものには、いつも生死の覚悟がいる。宗教的求道者の多くが、また旅の空に生涯する者の多くが、妻を持たない以上に、武蔵が妻を取らなかったことも、不思議ではないし、無理もないのである。[30]

二人のヒロインがいながらも、各々の好意だけが空回りしているように感じるのは、吉川自身も「武蔵が妻を取らなかった」ことを前提としているからだ。

佐々木が「美青年」「前髪」と形容されるのに対し、武蔵の容姿についての記載は、体格以外特に記されることは無い。しかし、物語冒頭（まだ悪童のタケゾウであった頃）では、後に又八と駆け落ちをするお甲に誘惑される。その娘の朱美にも長年慕われ続ける。また、三年間の修養の後、ヒロインのお通には恋心を告げられる。以上のことから、武蔵が魅力的な男性として設定されていることがうかがえる。武蔵は、お甲の誘惑を拒絶し、「恥を掻かせたな」と激怒され、朱美とは一度の再会に留まり、好意を受け流す。武蔵が唯一好意を抱くお通にでさえ、胸中の想いを伝えきることはなかった。吉川の描く武蔵は女性から慕われ、且つ女性に対し奥手な人物となっている。

この女性との関係性がない武蔵は、自身の生き方を二一か条に記した独行道の「恋慕の思ひ無し」の項目に由来している。[31] 新講談の渡辺霞亭の『宮本武蔵』にも「異性に触れた事が無い。ずっと独身生活を送っていたのである」とあり、同じく独行道の「恋慕の思ひ無し」への言及がされている。渡辺霞亭と吉川英治の宮本武蔵は、分量の多い作品であり、いくつかの共通点がうかがえる。剣の道を極める物語の中に女性を登場させ、登場人物の人間模様も描かれるようになるのである。女性の登場によって、武蔵の苦悩にも繋がり、物語に起伏を付ける効果が生まれた。それ以前の作品では、女性が登場し恋愛の描写がされることはなかった。

『宮本武蔵』のヒロインであるお通・朱美の人物像は、どのように描かれているのだろうか。お通は武蔵の幼馴染であり、又八の許嫁であった。又八がお甲と駆け落ちをした裏切りを機に、一生を武蔵に捧げることを決意する。作

中で他の男性と恋仲になることもなく、女性の処女性を貫き通す人物である。朱美はお甲の娘であり、年上の武蔵への好意を抱きながら成長する。武蔵以外の男には興味を示さないものの、遊女として生きる結果、吉岡清十郎に抱かれ「私は汚れてしまった」と自称するように、処女性を喪失する。ヒロインであるお通、朱美の両者も、武蔵と佐々木、又八の関係と同じく相反する存在なのである。物語の最後には、お通は武蔵を想い続ける様子が、朱美は又八との子を産み静かに暮らしている様子が描かれている。お通は永遠の処女性を保ち、朱美は処女性を失う対照的な結末である。

先述したが、武蔵と又八は、武蔵と佐々木とは違う方向性で対照的である。武蔵と佐々木は剣客としての生き方が対照的であったのに対し、武蔵と又八は人間として生き方が対照的であった。吉川が又八を読者の分身として物語に登場させた。尾崎秀樹は戦中の読者を代表して以下のように述べている。

戦中世代の実感でいうのだが、”二十歳までしか人生のなかった”私たちにとって、『宮本武蔵』は、”いかに生きるべきか”について教えてくれる一番手近な書物だった。[32]

又八も波乱万丈な人生を送ったが、武蔵に諭されたことで出家を決意し、最終的には家庭を築くことで落ち着いた生活を得ることになる。又八が武蔵から生きる方法を学ぶことと同様に読者も武蔵から「いかに生きるべきか」を教わったのだ。又八は読者の現実像に近く、武蔵は読者の持つ理想像に近い存在として位置づけられていると仮定する。読者は、又八に自己投影をし、又八が武蔵の生き方を学ぶことと、現実から理想の自己像へ成長する姿を同一化させ、教訓や修養を与えられていた。

また、武蔵とお通、又八と朱美の組み合わせも対照的である。武蔵は剣を、お通は愛を求め続ける存在であり、又八と朱美は常に煩悩に塗れた苦難の人生を送り、失敗の連続であった。朱美も読者と武蔵、お通の中間に位置している。

「天」と「地」の二つの世界に別れた二組の男女のカップルの共存は、剣豪物と市井物との二通りの歴史小説の作法を融合させたものである。[33]

ここでの「天」は武蔵とお通、「地」は又八と朱美のことである。物語中の又八、朱美からの視点は庶民の生活が中心に描かれていることからも市井物と捉えることもできる。しかし、ただの剣豪と市井の融合と捉えるだけではなく、この又八、朱美の市井観に修養が含まれていると捉えることができる。又八、朱美の生活は武蔵、お通に比べると写実的であり、失敗を繰り返しながらも、家庭を持ち平穏ながらも幸せを掴む結末である。武蔵とお通が結ばれた描写はなく、両者がどの様に生きていくことになったのかも不明確な物語の結末である。欲に溺れ、煩悩に塗れた庶民的な日常の中で、平穏な幸せを築く点では、又八と朱美の存在が社会の中での模範的な生き方を教えてくれる。武蔵とお通は理想的な、又八と朱美は庶民的な視点から、生きる方法についての修養を与えていたのである。

以上のように、明治期、大正期から内容は変化しながらも、『宮本武蔵』受け継ぐ要素も多い。吉川の意図する修養が戦時中の読者から支持を集め、人気作品になったことも明らかだ。しかし、戦後、『宮本武蔵』の持つ修養要素が軍国主義を促進する内容として、批判も浴びた。次項では戦後の『宮本武蔵』の評価について扱う。

三　戦後の『宮本武蔵』

戦後、軍国主義を促進する書物として『宮本武蔵』の著者である吉川英治へ批判の声も多かった。そのため吉川自身、『宮本武蔵』の補筆改訂を行った。また、民間人であり公職追放にはならないものの、吉川が公職追放該当者リストに挙げられたこともあった。[34] このことから、吉川文学と戦争には深い関係がある。

『宮本武蔵』の修養文化と軍国主義の関連性について以下のように評されている。

菊池寛や、大仏次郎や、山本有三のようなブルジョア的作家たちは、戦争を通じてファシズムに消極的に屈服

していったが、吉川英治は逆にファシズムを組織した。かれの足取りは『宮本武蔵』の成功を頂点として、日本ファシズム運動の発展と並行して作家的に成長している。（中略）かれの場合は、弱いものを立ち上がらせるための決定的契機を欠いているので、そのため最後には権力に屈服するという予定調和の外に出られないのである。これは文学者吉川の制約であるとともに、圧迫されている農民および中間層の自力更生の意欲が不可避的にファシズムの方向にまげられていく歴史的成約をも示している。[35]

あれだけ立派な吉川武蔵に変貌したかという遠因の最大なるものは、やはり、戦前の吉川武蔵が発表された時代相、いわば世を挙げて軍国主義につっ走った時代風潮が多分に反映しなければ納まらなかった必然性であろう。[36]

竹内好は、吉川が「ファシズムを組織した」作家であり、大衆を戦争へ導く作家であると述べ、武蔵野次郎は吉川武蔵は軍国主義の時代風潮を多分に反映したと評している。一方、批判だけではなく、軍国主義の要素がありながらも評価すべき部分もあると佐藤忠男は述べている。

確かに『宮本武蔵』を軍国主義的な作品だと言ったら言い過ぎになるだろうが、この土台にある自己完成ということの内容が、軍国主義イデオロギーの土台にあった人格主義美学の内容とほとんど一致するものであったことも確かである。（中略）イデオロギーとしての軍国主義は挫折しても、この種の人格美学は、そう簡単に否定されずに、いまもなお、強い郷愁となって日本人の中に生きているのである。[37]

現代まで読まれ続けている『宮本武蔵』であるが、戦後の批判された事実を避けては通れない。批判を受けながらも、読まれ続けている理由はどこにあるのだろうか。高橋磌一は、吉川の登場人物造型法について以下のように言及している。

作者が人間の類型を、戦国の動乱から徳川幕藩封建支配の確立の時期にとり、その安定化しつつある枠の中で、いかに「出世」するかという道を「求道」という形式で、くりかえし描いていることである。そこには武蔵や右近の歴史的、社会的環境は描かれるが如くして実は全く描かれていない。（中略）彼の世界観そのものを、ほとんど時空をぬきにした類型的人物を通じて日本型大衆の圧迫された枠のモラルに押し付け得たのでもあった。[38]

高橋の「社会的環境が全く描かれていない」とまでは言い切れない。武家社会の封建制や、村人の暮らしは詳細に描かれているからである。しかし、武蔵自身は流浪の身であり、大名や藩主に仕えることのない姿勢は一貫している。その点で、武蔵は社会的環境の外部に身を置いてると言える。また、『宮本武蔵』の戦前版には、戦中の国民性を表す「いかにして捨てたら二度と抱きしめることのできない生命に意義あらしめるか」と書かれ、戦後版の序文には戦争放棄を称えるように「かれが剣から入って脱却した究極の哲理は『無刀』つまり刀無しということだった」と書かれたことを高橋は指摘をしている。物語の大枠を変えずに表現を改訂するレベルに留まったのは、組織や体制の中で自らを磨き、高める「求道をテーマに立身出世を志す類型的」な宮本武蔵を通じて、戦前と戦後の異なる時代の社会背景に応じて描き分けることができたことも大きな理由の一つだろう。軍国主義の風潮から、平和主義の風潮に改訂しても、武蔵が自身を高める生き方をすることは据え置いていられたのだ。

「求道をテーマに立身出世を志す類型的」な宮本武蔵を吉川が描くことで、武蔵の個性が失われてしまうようにも思える。しかし、それだからこそ柔軟に時代に応じて変化することが可能であり、平成の世でも、『MUSASHI』、『バガボンド』など、『宮本武蔵』を原作としたドラマや漫画がメディアで再生されている理由にも説明が付く。明治、大正期の宮本武蔵作品の仇討ち、武者修行の物語は娯楽として荒唐無稽な作風も目立ったが、吉川の『宮本武蔵』は求道をテーマにした立身出世をする類型的な主人公であることで、時代や読者の変化に対応し、読み続けられているのだろう。

おわりに

明治期の速記講談は史実とは無関係の仇討ち物語であった。講談師から小説家へ書き手が移ることで生まれた大正期の新講談では武者修行の物語へと意図的に変化させた。これらの作品イメージを是正し、新たな宮本武蔵作品ことが吉川の目的の一つにあった。吉川は臨場感を持たせるために、歴史性を重視しており、明治期までの「仇討ちをする」宮本武蔵のアンチテーゼとして「仇討ちをされる」武蔵像を描いたのかもしれない。過去の宮本武蔵作品を是正する点では、大正期の新講談にも「仇討ちは昔の講談師の言ったでたらめ」と表記されることもあった。しかし、吉川は決して過去の宮本武蔵作品を無視することはなかった。吉川独自の武蔵像を作り上げながらも、明治、大正期の宮本武蔵作品の要素も多く取り入れ、過去の宮本武蔵作品を受け継いでいる。

歴史を深く調査し、過去の宮本武蔵作品の要素を盛り込みながらも、独自の路線で描いた吉川英治の『宮本武蔵』は、実在した宮本武蔵ではなく、過去の宮本武蔵作品の要素を多分に含んだ、文学としての宮本武蔵を描いた。日本人は、剣豪として実在した宮本武蔵ではなく、吉川の生み出した『宮本武蔵』を愛し続けているのである。

吉川の意図した修養の要素は戦後批判を浴びたこともあった。それでも尚、読まれ続けるのは、立身出世をする類型的な主人公像であったことが大きな要因となる。時代の変化に適応できる類型的主人公、それに適応できる読者、この相互補完によって現代まで『宮本武蔵』は読み続けられてきたと言える。そして、これからも時代の変化に合わせ読まれ続けることだろう。社会での競争の中で、努力により自身を高め、出世する姿はいつの時代にも読者が理想とし、自己投影が可能だ。宮本武蔵が多くの読者に読まれてきたのは、吉川の功績とも言えるが、吉川の武蔵以前にも、多くの宮本武蔵作品があり、その要素を吉川が引き継ぎ、現代まで読み継がれているのである。

［注］

1　拙稿「宮本武蔵作品の受容と再生」（『リテラシー史研究』第

六号、二〇一三年二月）

2　講演伝記系は、武蔵の人物像が明治期の作品同士を相対的に比べると、伝記に基づいている。講演大衆系は、人格者としての武蔵や仇としての佐々木の卑劣さを強調し、より創作された人物像の描かれ方をしている。非講演系は、江戸期の芝居の内容を組み込んでいない。

3　大正初期、講談師は浪花節の隆盛に驚異を覚えており、一九一三年に速記者である今村次郎が『講談倶楽部』誌上での浪花節速記の掲載を止めないと、講談師は連載を拒否することを申し入れたことで、野間清治と講談界が決別した騒動。

4　吉川英治『宮本武蔵』（『朝日新聞』、一九三五年―一九三九年）

5　松本昭「吉川英治の魅力」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一年一〇月）

6　佐藤忠男「吉川英治の小説と映画」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一年一〇月）

7　塚越和夫「吉川英治論」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一年一〇月）

8　鈴木貞美「吉川英治の歴史観」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一年一〇月）

9　安宅夏男「吉川英治と直木三十五」（『国文学　解釈と鑑賞』、二〇〇一年一〇月）

10　引用者注

11　桜井良樹『宮本武蔵の読まれ方』（二〇〇三・四、吉川弘文館）

12　尾崎秀樹『伝記宮本武蔵』（一九七〇・一〇、講談社）

13　千葉亀雄『新版日本仇討』（一九三一・二、天人社書房）

14　吉川英治『折々の記』（一九四二・五、全国書房）

15　前出、吉川英治『宮本武蔵』旧序

16　吉川英治『随筆宮本武蔵』（一九五三・六、講談社）

17　吉川英治「草思堂随筆」（『現代』、一九三六年七月号）

18　前出、尾崎秀樹『伝記宮本武蔵』

19　櫻井良樹『「宮本武蔵」は生き続けるか』（二〇〇一・四、文真堂）

20　前出、吉川英治『随筆宮本武蔵』

21　吉川英治『宮本武蔵』八巻（一九九〇、講談社、吉川英治歴史時代文庫）の背表紙に記載されている。

22　拙稿「宮本武蔵、大正期の変容――速記講談から新講談へ――」（『リテラシー史研究』第七号、二〇一四年二月）

23　村上元三「佐々木小次郎」（『朝日新聞』一九五〇年―一九五一年）
24　渡辺霞亭「宮本武蔵」（『講談倶楽部』一九二五年一月―一九二六年九月）
25　『二天記』一七五五年（『二天記』は、武藤厳男等編『肥後文献叢書　第二巻』、一九〇九年、隆文館に収録。）
26　前出、吉川英治『随筆宮本武蔵』
27　丹治峯均『武州伝来記』（一七二七年。光田福一による写本）『兵法太祖武蔵守玄信公伝来』（一九九〇年、編者発行）を使用。
28　引用者注
29　前出、吉川英治『随筆宮本武蔵』
30　前出、吉川英治『随筆宮本武蔵』
31　宮本武蔵原著、佐藤正英校注『五輪書』（二〇〇九・一、筑摩書房）にて閲覧。
32　尾崎秀樹『宮本武蔵』――求道者としての武蔵像」（『太陽』、一九七三年五月）
33　島内景二「永遠の武蔵像・吉川英治」（『歴史読本』、二〇〇一年一月号）
34　前出、桜井良樹『宮本武蔵の読まれ方』
35　竹内好「吉川英治論」（『思想の科学』、一九五四年一〇月）
36　武蔵野次郎「近代文学に造型された歴史上の人物」（『国文学　解釈と教材の研究』、一九六九年一二月）
37　佐藤忠男『日本映画と日本文化』（一九八七・七、未来社）
38　高橋磌一『歴史家の散歩』（一九五五・二、河出書房）